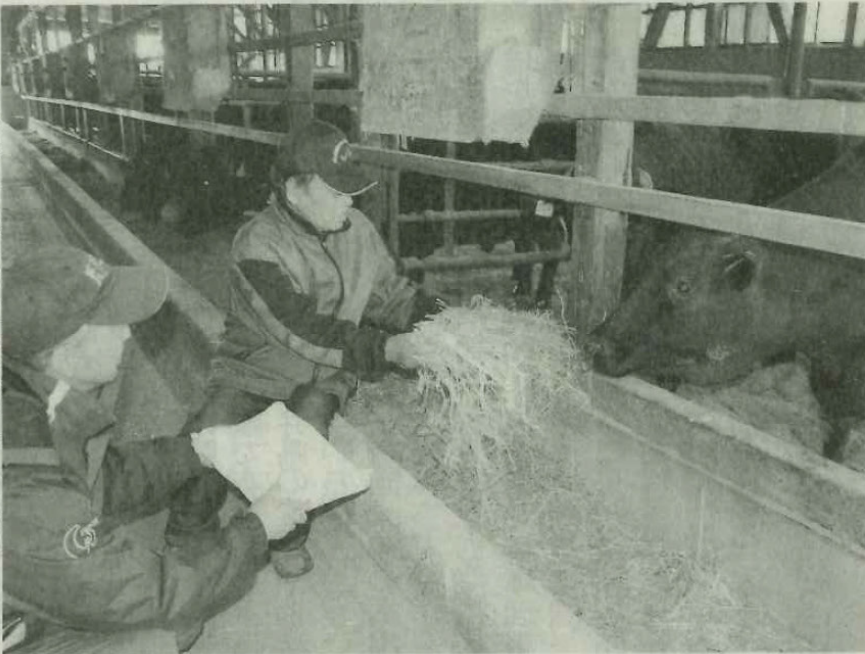


農畜産業で乳酸菌活躍

家畜免疫力アップ 夏場の牛舎臭軽減 乳房炎回復早める 水稻の根張り良好

コンクリート事業などを手掛けるホクコン（福井市）が所有、販売する乳酸菌を、畜産や農業に活用する取り組みが広がっている。乳酸菌入りの飼料を家畜に与えることで自己免疫力が上がり、肉牛は肥大が良くなり、乳牛は乳質が良くなるなど、農家から喜びの声が聞かれている。

同社は、田んぼの用水路などで使うコンクリート2次製品を製造。農業分野の事業にかかわる中で、プロバイオティクス（生菌剤）に着目し、10年ほど前から乳酸菌の研究を始めた。同社が特許を申請している大豆由来の乳酸菌は、摂取すると粘膜や血中のIgA濃度が上がることがマウスを使った研究で確認されており、病気になるにくい



乳酸菌を混ぜた飼料を食べて育った肉牛

経営改善に生かして

体づくりが期待される。IgAは腸内などに存在する抗体の一種で、アレルギーやウイルス、毒素から粘膜を保護する役割を持つ。

昨年、県を退職し、同社の技術顧問を務める獣医師の小林修一さんが、農家の経営改善に生かしてもらおうと、乳酸菌を紹介。2016年に若狭牛の肥育農家、サン・ピーフ齋藤牧場（坂井市）の齋藤俊雄社長から育ち

気になりにくくなり治療費が半分以下になった」と喜ぶ。

酪農の森國牧場（福井市）では、昨年6月から70頭の乳牛に乳酸菌を給与している。森國善幸代表は「乳房炎になっても回復が早くなり、抗生物質を使う回数が減った。夏場の牛舎の臭いも軽減した」と話した。酪農と水稲を複合経営する名津井農場（福井市）の名津井萬会長は昨年8月から

水稲でもゲル状の乳酸菌を取水口から投入することで、農薬を減らし、倒伏しにくい丈夫な稲体づくりに取り組み事例がある。ファーム本田（坂井市）では昨年、10日間プール育苗の際にも乳酸菌を投入した。本田雄揮代表は「慣行の育苗ハウスでは立枯病が出たが、乳酸菌を入れたハウスでは病気が出ず、根張りも良好で違いが明らかだった」と振り返った。

福井の企業が所有・販売

分げつが旺盛になるため収量増が期待できる

の悪い牛がいると相談を持ちかけられたことから、餌に乳酸菌の添加を提案した。健康状態が回復したため、現在は子牛にとってストレスを感じやすい買い入れから2カ月の間、全頭に乳酸菌入りの餌を与えている。齋藤社長は「乳酸菌を使い出してから肥大が良くなり、従来より4カ月ほど出荷を早めることができている。枝肉の格付けも良くなった。何より、病

使用。慢性の乳房炎の乳牛がいると、乳中の体細胞数が基準値を超えてしまったという。現在は基準値を下回っている上、乳脂肪分が平均で0.3%ほど上昇し、奨励金が支払われるほどになった。

小林技術顧問は「家畜への抗生物質使用が厳しくなる中、病気予防の観点からプロバイオティクスが見直されている。農家の要望を聞きながら経営安定に貢献していきたい」と話している。

（ふくい）